

あそ

1

2009



上野動物園



竹僊堂

今号より保多孝三先生（1908～1985）の篆刻作品を保多康成様のご厚意により『柞廬印存』よりご紹介いたします。数年前山田正平作品をご紹介させていただきました。篆刻美術館のホームページで「保多芸術の特徴は、保多氏自身の話によれば「篆刻を学ぶのに専師を持たなかった」ことです。しかし30歳の時に、山田正平氏（当館で平成4年企画展実施）作品を見て、山田氏に私淑してゆきます。」とありました。これも縁かと思ひました。今月の作品はある日保多先生がひょいと尋ねてこられ置いて行かれました。私の大切な宝物です。いつみても見飽きぬ三字のバランスの妙味を楽しんでゐます。（佐藤喜孝）

あを

一月



夕 瀧

本三宮前

佐藤喜孝

夕瀧の挂るばかりにほの白く
わびすけに歩を返したるひとりかな
げんげんと言言とある藪椿
月白や迎へに外へつゆけかり
川浪の二三の白く秋の夕

母の里

白金 東 亜 未

冬もみぢ久し振りねと墓に寄る
駒飼は母の里の名木守柿
本堂の足元にくる隙間風
縁側にちよこんと母が柿紅葉
雁渡る高き山より白くなる

町

四日市

長崎桂子

里山に魅せられてをり罽雲
秋の雲生き物のうごめくごとし
幼児の一途に走り稲運ぶ
秋櫻メニエル症状震度一
小春日や詣での道の馨しき

鶏頭花

さいたま

早崎泰江

鶏頭花不死身のごとく立ちつくす
落葉掃く蜥蜴かくれてをりにけり
枯薄まだやさしさを残しをり
テールにぼとり落ちたり冬の蠅
冬茜鴉も見るか遠き富士

町屋 藤野壽子

和洋折衷日本列島冬に入る
江戸薩摩和睦のドラマ冬の虹
柿蜜柑供へて平和いとうれし
白障子畳に坐る和の心
和箆笥に形見の袷又しまふ

てのひらの火を絶やさずに餅を搗く
寒雀ひとのうしろをみて弾む
ここにも筆あそこにも筆冬籠
裏おもて無いセーターで歩き出す
雪をんな人のまことを恋ひ歩く

新宿 堀内一郎

新宿 森山のりこ

木枯の一号ありぬ背を押す
木戸の鈴鳴らし猫飛ぶ秋日和
様々な桜紅葉の手に溢れ
紅葉狩歓声上がるバスの旅
振りむけば紅葉谷又紅葉山

紙飛行機

上高田 森理和

団栗や塩おむすびを一つづつ
大脚立林檎と顔を並べをる
掌に少し押し上げ林檎挽ぐ
兄弟で父の法要烏瓜
芝枯るる紙飛行機の十二折

葬送や冬の鴉の鳴き合へり
灯るごと人の背あり酉の市
威勢よく声のやりとり酉の市
枯菊の炎ひとつになりけり
新宿に雨上りたる冬の星

本三西

吉成美代子

あらたま

一葉からひと葉先んずお正月
真綿雲月の真上に大旦
風に風生れて日の本初日かな
水鏡面^{おも}をおとして大旦
初詣色葉踏み敷く階の上

本三宮前

吉弘恭子

秋 蝶

鹿手袋

渡邊友七

荒尾根の雲のなだるる芒かな
頬ゆたに弥陀笑みたまふ菊の前
秋蝶の動かぬ宙や竹眩し
ものなべて秋の明るさ風のみち
月光に大野の河の音もなし

壺 岐 料

清瀬

赤座典子

壺州の甘き橙ポン酢とす
島豆腐は大陸の固さ鴨の鍋
鴨哀れその美味故に撃たれけり
熱爛はメインの鍋で登場す
息白し乗過したる夜更け道

煮凝は一口がよい父の言
八雲作母となり消ゆ雪女
花豆に差し水しつつ十二月
大皿の金目鯛の目と合ひにけり
貌あげてベランダにゐる枯蠟螂

桜ヶ丘 安部里子

冬めく

冬めけるかすかなものに躓きて
冬めける蛇口の水の一しづく
冬めくや眼底検査の麻酔葉
柿落葉村の祭は終りけり
枯れ急ぐものの囁き山嵐

向島 遠藤 実

なつかしき景となりたり鴨飛来
鴨の群戯るも争ふも同じ声
枯れはちす刈られし池の水広し
冬菊の枯れなんとして色残す
落葉焚通りすがりが寄ってゆく

逗子 鎌倉喜久恵

白内障手術

手術前鬱と秋思とこもごもに
金眼帯てふ冷たき器具をひと夜眼に
短日の片眼の視野のおぼつか
甦る眼にあたたかき冬灯
小春日や医師も機嫌の良き術後

川崎 木村茂登子

銀座 篠田純子

花 柎 脳 の 隙 間 に 咲 い て ゐ る
胃 の 中 を く ま な く 照 ら し 冬 ざ る る
地 下 駅 の 核 シェ ル ター め く 文 化 の 日
隣 室 よ り パ ソ コ ン の 音 冬 に 入 る
山 茶 花 や 傘 を 傾 げ て 江 戸 し ぐ さ

柿 落 葉 碁 盤 の 上 に 白 と 黒
残 り た る 一 羽 の 月 日 白 鳥 来 る
先 生 の 白 鳥 見 守 る 鴨 達 を
ひ ら く 傘 と ぢ る 傘 駅 し ぐ れ け り
い し やー き い も 十 一 月 が 歩 い て 来 る

千駄木 芝 尚子

白

木の実落ち毀れるやうに認知症
大粒のぎんなん数多旅土産
日記帳ときどき白紙石露の花
時雨るるや中野坂上ビルの風
炉開の切口美しき桜炭

宝泉寺前

芝宮須磨子

一葉忌

藁売つてすこしく富む夜天の川
一輛が硝酸積んで野分の貨車
抽斗に風の神棲む目貼以後
飴玉や口中細り片時雨
神棚へ届くつまだち一葉忌

輪島

定梶じょう

所沢 須賀敏子

ピカソ展小春日和の六本木
双子山帰る列車の冬茜
バスツアー華やぐショール膝の上
日は西に六番札所実南天
作り手のまめまめしさや干柿食ぶ

冬に入るいつもの場所に血圧計
コスモス畑「刈取り自由」鎌を置き
淋しさは過去のものとする银杏飯
凍蝶に山椒の刺ばかりなり
額の手夢の母なり冷たかり

本三西 鈴木多枝子

逆上がり

浦和 竹内弘子

筆順をテレビに習ふ炬燵かな
逆上がりの練習板にもみぢ降る
筆屋から孫が出てくる暮の秋
横一文字に秋刀魚焼上がる
太刀魚の櫂がけなる筆生姜

冬落暉

田端 田中藤穂

若人の皓齒そろひぬ芸術祭
冬落暉一本道はモネの絵に
過去はみな美しくなり花エリカ
たれも居ず蒔菖玉の吊るされて
立冬の部屋に一匹ちちる虫

十二月作品より

田中藤穂・王岩

金言のごとくにひらく枇杷に花

佐藤喜孝

枇杷の花は冬の花だ。枇杷は葉も緑色がくすんでいて地味だが、花はその葉蔭にひっそりと小さな花を固まって咲かせる。色はややべージュがかった白だが、目立たない花だ。むしろ花の咲きはじめる頃の芳香で人に足を止めさせる。私は枇杷の花が好きだ。あの小さな目立たない花が、初夏になって実となる時の輝かしい金色を思ふと、胸がドキドキする。人にたとえれば、控え目でいて、内に自信を秘めているような奥床しさがある。

自己主張しているのは芳香だけだが、この句の「金言のごとくにひらく」のところが、何となく解るような気がする。

秋うらら靴口今といふかたち

東 亜 未

只今といふかたちとはどんなかたちなのでしょう。ともかく、きちんと揃えられてはいないように思う。元気な子供が「只今っ」と言いながら家へ駆けこんで、靴はやや離れ離れ、その足取りやスピードまで惚ばれるのか。それとも無造作に脱がれたお父さんの靴かしら、いつもの内股がそのままだったりして。

秋うららの季語がこの句をゆったりと楽しくしている。こういう句はおおらかで素直な方であれば詠めない句で、作者のお人柄も惚ばれる一句です。

十三夜何とはなしの立話

吉弘恭子

中秋の名月に比べて、十三夜となると秋もぐつと深まる。満月にはあと二夜あって、まだ月がすかさに欠けているというところも、何か情緒深い気がする。何とはなしの立話をするに

ぴったりだ。立話はすぐに終って、別れて家に入ったように思う。雰囲気のある佳句と思いません。

待つほどに白蝶貝の後の月

赤座典子

後の月を詠んだ句は数限りなくあるけれども、白蝶貝という譬えには始めて出遇った。九月の十五夜の耿耿とした明るさに比べると、十月の後の月、十三夜は、夜気も冷え冷えとしてきて、月の光もどこか青みを帯びて美しさに凄みがある。昔の人は月をじっと見てはいけなと言ったが、確かに異界へ連れてゆかれそうな気がする。

典子さんは、今夜は十三夜だわと思って、月の出を待っていた。登ってきた月はまるで白蝶貝のように、白い真珠のような光沢を放って空を渡り始めた。思わず自然に白蝶貝という連想が浮んだのですが、そこが素晴らしい。典子さんの記念すべき一句になると思います。

落葉踏む長き石段鐘楼へ

木村茂登子

總持寺吟行の時の句。總持寺は大きなお寺でした。駐車場の後に小高い所があつて、登れば鐘楼と芭蕉の句碑があるとの事でした。茂登子さんと、何人かの健脚の方が長い石段を登って行かれました。石段に積もった落葉を踏んで行かれたのでしょうか。落葉踏むより落葉積むの方がよいかと思えます。

三十分もかかった本堂の中の見学も、朱塗の御膳で頂いた精進料理も、とても楽しくて貴重な経験で感謝しております。

てらてらと百間廊下萩の風

篠田純子

これも總持寺での作品です。大きなお寺の一直線の長い廊下が、長年修行僧によつて拭き上げられ、てらてらと光っていました。廊下の窓は開け放たれて、窓辺にある萩を通つてきた風が心地よく感じられました。

見たままを詠んで気持よい一句になつていま

す。

ねこじゃらし猫にそっぽを向かれり 芝 尚子

尚子さんのところには、モモちゃんという高級な猫が居る。尚子さんは外出の折にふと目にとまった猫じゃらしを二三本手折ってきて、モモちゃんの顔の前で揺らしてみたのでしょうか。

“ねこじゃらし”と名があるのだから喜んで反応するかと思いきや、すつと一瞥をくれただけでそっぽを向いてしまった。何だか人間の方が軽蔑されている感じ。尚子さんのお顔も目に浮ぶようで、思わず笑ってしまった。

あの向かう遙かにおろしや落穂かな 定梶じょう

じょうさんは海岸に立って北方を見ている。この海の遙か向こうにはロシアがあるのだと思いながら。手には一穂の落穂がある。

おろしやロシアは一時ソビエトと国名を変え、またロシアに戻った。戦前はソビエトの共産主義は日本では禁止されていたので、ヨ-

ロッパやアメリカのように自由な往来がなかったように、近くて遠い謎の国だった。でも美しい建築物や、バレエや音楽、トルストイやチェホフやドフトエフスキーの文学などで、芸術性や文化の高い国とも思われた。でもまた、第二次大戦の終戦の時、帰国されるべき日本人（ドイツ人も）をシベリアへ連れ去り、強制労働をさせて多くの生命を失わせたことなど思うと、ロシアへの思いは大変複雑である。

ロシアでも初夏には小麦が実り、秋には米も実るだろう。一穂の落穂から、寒いが広大なロシアの国土への思いが拡がる。シベリアに抑留された人たちの飢えにも繋がる。

この句は上五、中七の言い回しから、下五の落穂かなまで見事に構成されており、拡がりがあり、じょうさんの練達の一句だと思えます。

秋祭見馴れぬ男ばかりなり

須賀敏子

敏子さんの地元の神社の秋祭。以前は何となく地元の人らしい人達や、中には顔見知りの人

にも何人か出遇ったのだけれど、何だか居るのは見馴れぬ男ばかりだ。この頃はお御輿をかつぎに遠くから出かけてくる人達があるとか。それとも何時の間にか住民が入れ替ったのか。何につけても移り変りの烈しい昨今の世の中で

手を替へて墨磨りおろす十三夜

鈴木多枝子

硯の海に水を入れて墨を磨り出すと、墨のよい香りが漂う。心が落ちついて満ち足りる一時だ。けれど、墨汁が沢山いるときは、なかなか時間がかかって、手が疲れてくる。

多枝子さんも右手から左手に替えて墨を磨っている。これから何を書かれるのでしょうか。折しも十三夜、熱心で風流な時間が過ぎてゆきま

秋天や小さくなりし体操着

竹内弘子

秋天に体操着というと、運動会を思い出します。

子供の成長は烈しくて、服でも靴でもあつという間に小さくなつてしまいます。親にしてみれば嬉しい驚き、でも財布の方も大変。そうこうしながらみんな子供は一人前に育つてゆくのです。

秋天という澄んだおらかな季語が、とてもよく合つていると思います。(以上 田中藤穂)

久々に恩師に会ふや桃の花

鈴木多枝子

「桃の花が咲き乱れる頃、久しぶりに恩師に会いに行く」という平明な句意であるが、季語の「桃の花」との組み合わせは、情緒豊かな詩情を醸し出している。

春日遅遅、久しぶりにお目にかかった恩師との昔話に花を咲かせている作者の姿も髣髴させる。

因みに、中国語には「桃李滿天下」という言葉がある。春秋時代から優秀な教え子を「桃」と「李」に譬えるようになったといふので、「桃李滿天下」とは、「桃李 天下に滿つ」ことで、

優秀な教え子が各地に散らばっているという意味である。(五月号)

天高し蟹工船の本の山

遠藤 実

『蟹工船』は、1929年に全日本無産者芸術連盟の機関誌である『戦旗』で発表された初期プロレタリア文学の代表的作品である。作者の小林多喜二は、この小説を通して、蟹工船で働く貧しい労働者たちの群像をリアルに描き出して、高い評価を受けた。その評価は日本だけでなく、国際的にも広がった。中国でも早くその翻訳があり、恐らく小林多喜二は中国の読者の最も知っている日本小説家の一人であろう。

『蟹工船』が発表されて今年で八十年になる。いろんな意味で、今日の社会状況は八十年前のそれとは同日には論じられない。しかし、昨年にはこの小説は若い世代の共感呼んだ。新潮文庫の『蟹工船・党生活者』が百万部のベストセラーになったという。

「蟹工船の本の山」という描写は、決して詩的誇張ではなからう。

非正規雇用の増大、働く貧困層の拡大、低賃金長時間労働の蔓延……こうした現状は、蟹工船の中で酷使された労働者たちのイメージを蘇らせたのであろう。

しかし、今は不景気で大変だけど、将来は全く暗いというわけでもない。明るい未来に向けて頑張ろう。「天高し」という季語から、私はそのような期待感を読み取った。(十月号)

(以上 王岩)

一年の永きにわたり田中藤穂さんに鑑賞をおねがひした。深さと広がりのある文に励まされた人も多かったとおもふ。私もその一人である。一月号作品から王岩先生におねがひしました。不安だと仰られ二句ほど練習と称して書かれた。日の目を見ないのが欲しい文意なのでここに掲載させて頂きました。(喜孝)

草市や縄文びとほどの足算	佐藤喜孝
蝟色の夜明け秋思の椅子に在り	田中藤穂
秋うらら靴只今といふかたち	東亜未
秋うらら自動装置のやさしさ怖さ	長崎桂子
寂かなり雲離れゆく十三夜	早崎泰江
乗る並ぶ走るデイズニールاند秋	藤野寿子
木守柿離ればなれに急がぬ村	堀内一郎
満月を見上げ思はず手を合はず	森山のりこ
ふるるとふるると揺れ野紺菊	森理和
子の影を踏みて佃の十三夜	吉弘恭子
待つほどに白蝶貝の後の月	赤座典子



前月作品

トランプの億万長者夜食とる	安部里子
鍵かけぬ村の小高に木守柿	遠藤実
終日を籠りし夜よ地虫鳴く	鎌倉喜久恵
秋の蝶今日は蛹となりし朝	木村茂登子
てらてらと百間廊下萩の風	篠田純子
敬老日長生きをしてさびしかり	芝尚子
甲州のボジョレーヌーボー友来る	芝宮須磨子
瓢箪やむかしむかしあるところに	定梶じょう
秋祭見馴れぬ男ばかりなり	須賀敏子
樹の上で山桃食べし波の音	鈴木多枝子
秋天や小さくなりし体操着	竹内弘子

喜孝 抄



近世俳諧と漢詩文 2 拾五

王岩

一樹寒梅白玉条

香は室にそれは入道政常歟

桃隣

桃隣は天野氏、寛永十六年（一六三九）〜享保四年（一七一九）、通称は藤太夫。別号に桃隣・太白堂・呉竹軒・桃池堂・桃翁などがある。伊賀上野の人で、芭蕉と血縁関係があったという。句前の七言一句「一樹寒梅白玉条」は中唐の詩人張謂「早梅」詩の起句である。

一樹寒梅白玉条、一樹の寒梅 白玉の条

迴臨村路傍溪橋。 迴かに臨む 村路 溪橋に傍す

不知近水花先發、水に近きところ 花先きに発くを知らざれば

疑是經冬雪未消。 疑ふらくは是れ冬を経て 雪未だ消えざるかと

『唐詩選』には張謂の七言絶句が二首収録してあり、それぞれ「題長安主人壁（長安主人の壁に題す）」と「送人使河源（人の河源に使用するを送る）」である。「早梅」はなかった。『三体詩』や『聯珠詩格』など近世の俳人がよく読んだ詩集を閲したが、発見できなかった。『全唐詩』に載るはずだが、しかし、清の康熙帝の命により編纂された九〇〇巻もある『全唐詩』は一七〇七年序刊なので、桃隣はそこから読んだ可能性が低いだろう。もしかすると、桃隣は江戸時代に流布した他の何とかの詩集で「早梅」を読んだであろう。

桃隣がどんな書物を通じて「早梅」を読んだかどうか詳かではないが、いずれにせよ、「早梅」詩が桃隣の教養の中にあるのは事実である。

遙か遠く村落の橋のそばに、寒梅が白い花を咲かせている。分れ出た枝の花がまるで白玉のように見える。水際に近くて花が先に開いたことを知らずに、冬の雪が未だに消えずに残っているかのようだ。

桃隣句に詠まれた入道政常とは、江戸初期の尾張の刀工で名古屋に住んでいた。氏房・信高と並んで尾張三作と呼ばれ、関の作風を伝えて尾張関ともいう。隠居後、政常入道と名乗る。桃隣は何かの意図で、「一樹寒梅白玉条」を句題にして「香は室にそれは入道政常歟」と詠んだにちがいない。

入道政常が隠居した室の傍に寒梅は咲き匂う。風のまにまに漂ってくるその香りは寒中白無垢の装飾を纏って刀剣に魂を入れている入道政常を連想させるか、或いは「一樹寒梅白玉条」という視覚から、入道政常の

その見事な劔太刀を暗示させるのかもしれない。品格の高い寒中に咲き誇る白梅とその香りは、刀工入道政常のイメージを鮮やかに際立たせる好個の媒介であろう。

桃 隣

白桃や雫もおちず水の色
三日月やはや手にさはる草の露
物嗅き合羽や今日の更衣
ゆく水の跡や片寄す菱の花
うぐひすの声に起行雀かな
昼舟に乗るやふしみの桃の花
聞までは二階にねたりほとゝぎす
五日迄水すみかぬるあやめかな
宮城野の萩や夏より秋の花
名月や雲みむため庭の松
翡翠のまぎれて住か杜若
木の下やくらがり照す山椿

あひだとぎるる大名の供

子珊

身にあたる風もふわふわ薄月夜

桃隣

つよう降たる雨のついやむ

利牛

瓜の花是からなんぼ手にかかる

桃隣

杉の木末に月かたぐ也

利牛

同じ事老の咄しのあくどくて

桃隣

七ツのかねに駕籠呼に来る

杉風

花の雨あらそふ内に降出して

桃隣

あをかき集 竹内弘子選

(六人目以降五十音順)

夜なべまだつづく鳩舎に鳩ねむり

定梶じょう

晩秋の灯して帰る霊柩車

はたと対峙す立冬の油虫

懸けつらね大根の栄え夜を待つ

円錐のぶりき井戸蓋霰どき

右に暖炉左に夫を感じをり

篠田 純子

初紅葉ピカソの描く普通の絵

柗の花白粥に粉ぐすり

城門の夜の白壁悴めり

石路の花言ひたきことが母の眼に

飛ぶやうに過ぎてゆく日々花八手

田中 藤穂

筆柿はみんな鴉にくれてやる

わたしだけ取り残されし冬紅葉

山崩るごとき訃のくる冬の雲

芝 尚子

陽の残るお茶の花咲く一ところ
地平線に佐渡うつすらと冬日向
鶴岡で羽衣の能あはあはと
染井墓地あつけらかんと白むくげ

干柿や愕然とする記憶力

ねぼけ猫干柿に手を伸ばしをり

千歳飴ひきずる子供引摺られ

軒下になんでも吊す冬日影

漢字表睨むでひねもす日向ぼこ

ひとところ記憶薄れて神迎

病院で待つ間の讀書時雨来る

小春日や鬱断つ如く髪を切る

リハビリの機械にも慣れ秋時雨

クラス会欠席多し菊日和

冬薔薇検査待つ日の近づきぬ

神無月日々若返る待ち合せ

久々に封書ふつくら唐辛子

大正の卜記号模様秋袷

鎌倉喜久恵

森山のりこ

森 理和

葉を茹でし湯は金盃悴む手

まどかなる月に熒惑そつと寄り

夜光杯月のまどかを酌み隠し

蓮の実のとんで浮津の砂に埋む

抱瓶を小脇に早足枯野道

冬立つや櫂並木のくすみをり

蛸焼も優勝セール冬帽子

娘の来る日蒲団は疾うにふつくらと

冬桜煙草一服して去れり

神無月さうとは知らず生れけり

携帯の注意恐ろし冬車内

柿落葉実も撓なる十五年

庭中の満天星躑躅紅葉す

親指で話す携帯文化の日

どこまでも監視カメラの師走かな

気短を背負ひ半生石路の花

釣鐘の微動の界に寒気あり

久々の笑顔に会ふや着ぶくれて

少し鬱目深にかむる冬帽子

枝振りの影それぞれに冬木立

山眠る爆裂口を裏に抱き

おぼろげな夢の余白や冬の朝

銀杏の爆せて厨房大騒ぎ

すこやかな膝小僧そろふ文化祭

この不安どこから来るか冬の暮

紅葉狩見るべきところみな廻り

稽田に鳥避けにした赤い布

一面の葱の青さが押し寄せる

力入れ滑らぬやうに秋の雨

思ひごと一時忘れ糸糸編む

破れずに障子うつすら古りにけり

耐へがたき不況のあらし冬紅葉

冬紅葉何時もの顔のベンチかな

蹲踞に落ちて広がる冬紅葉

冬の庭石燈籠に灯を点す

しぐるるや舞台稽古の足拍子

吉弘 恭子

赤座 典子

安部 里子

遠藤 実

木村茂登子

芝宮須磨子

鈴木多枝子

須賀 敏子

東 亜 未

神の塩皿に山盛七五三

枯櫨の根元に花壇小さき花

枯芝に老も若きもボール蹴る

冬ざれや街に笹竹音ひそか

冬ざれの事故に言葉の少なき夜

ここちよき満月でありし十一月

秋日ざし鉛筆削る音しづか

少女来るすらりと伸びて石路の花

笑ふこと少なき日々や冬の入る

里神楽イザナミイザナギ愛もつれ

志半ばのドラマ冬燈

廃校に鳴かん高し車椅子

寒橋は祖父の手垢の黒光り

長崎 桂子

早崎 泰江

藤野 寿子

さ。夜露にぬれ日に当り、風に乾いて次第に黄味を

帯び独特の甘みをたくわえてゆく大根。栄光の大根

を懸け終えて自ら称えている作者と受取りました。

へはたと対峙する立冬の油虫へはお手のものの俳諧。

石路の花言ひたきことが母に眼に

純子

一読ぐつとくるものがありました。黙々と母上を

看取っておられるのだと思いました。へ初紅葉ピカ

ソの描く普通の絵へがおもしろいです。後年のピカ

ソは普通じゃないですね。

わたしだけ取り残されし冬紅葉

藤穂

へ山崩るごとき計のくる冬の雲へとあわせて、ど

んな困難にもめげない気骨と、優しさを感じました。

敢て言葉へ俳句へにする理知を感じました。

懸けつらね大根の栄え夜を待つ

じょう

染井墓地あつけらかんと白むくげ

尚子

夜目にも白く鮮やかに懸けつらねた大根の見事

巢鴨の地藏通りを抜けて行くと「染井の墓地」に



でる。芥川龍之介の墓は黒御影で、こじんまりした箱形の上に名が彫られ、別に同様の芥川家の墓と彫られたものと二つあった。

三鷹にある森鷗外や太宰治の墓も小さいものだ。中七以下のやや剽げたような意味のない言葉づかいがいい。富も名声も「あつけらかん」である。

千歳飴ひきずる子供引摺られ

喜久恵

千歳飴の袋は長いときまっつているようだ。

着物だと履物が厄介で、じきにベソをかきだして歩けなくなる。飴の袋も子供も引摺られて行くのである。

小春日や鬱断つ如く髪を切る

のりこ

鬱陶しいの鬱ですからその程度だと思ふことにしています。私も鬱々と気の霽れないことがよくあります。北杜夫氏が自身の躁鬱病をユーモラスに書いて鬱が市民権を得たのはよかつたと思つています。

へアスタイルがさつぱりすると前向きな気分になりますものね。

久々に封書ふつくら唐辛子

理和

お知合いから「唐辛子」の詰まつたお便りが届いたようです。真正銘の自家製。買物のたび、裏に書かれた添加物を読むのがクセになりましたが、細かい字でびつしり書いてあると、いい加減なところでやめて買つたり買わなかつたりします。

まどかなる月に熒惑そつと寄り

恭子

火星のことを熒惑けいごくまたは（けいわく）というのを恭子さんの俳句ではじめて知りました。

五日ほど前の夜六時頃、浦和駅の東口から家に向つて帰る時、前方の中天にまんまるの月が、書割のように嵌めたように浮んでいた。寒に入ったといつても、すさまじい冷たさはなく、ほんのり朱色を帯びて「わたしがあつく、お月さまがあつく」と

絵本にあったように、ゆるい坂を下りて行つた。まことに「まどかな月」でした。濁世を一時いっとき忘れましました。

冬桜煙草一服して去れり

典子

浦和の調しまのみや句会の十二月は、駅から五分ほどの古い料理旅館「千代田」の、とろろ御膳で忘年会ということになつている。門を入ると、玄関の脇に淡紅色の「冬桜」がしずかに咲いている。千代田から中仙道沿いを南に少し歩くと左が調神社、右が句会場の岸町公民館。句会の始まる一時に充分間に合います。

神無月さうとは知らず生れけり

里子

陰曆十月、諸国の神々がごとごとく出雲の国へ旅されるため留守だということだそうです。川柳の趣があつておもしろい。

親指で話す携帯文化の日

実

「携帯」を自在に操つているのが作者自身なのか、

作者は傍観しているだけなのかよく分りませんが「文化の日」がシニック。

少し鬱目深にかむる冬帽子

茂登子

つい先日テレビで、男性と女性では女性の方が鬱になりやすいと専門の医師が言つていた。作者は信仰の篤い方で前の川崎大師、つい先だつての鶴見の総持寺の吟行など、きびきびとお世話くださり、明晰な印象しかありませんが、掲句のようなこともあるのですね。

この不安どこから来るか冬の暮

須磨子

ある方が、俳句をやつていると辛いとか淋しいとか考へている余裕がない、という意味のことを言つていましたが、実存哲学の概念“不安”は考へ出すとキリがありません。考へるゆとりがない方がいいようです。

紅葉狩見るべきところみな廻り

多枝子

紅葉の名所といわれる処を廻ってしまつたら、俳句を作るほかありませんね。廻つた所の数だけ出来ると思います。気付かなかつた所があるものです。

思ひごと一時忘れ毛糸編む

敏子

「毛糸編」はいいですね。集中すると「思ひごと」を忘れます。手の先を持續して使うのがいいようです。下を向いて一途に編んでいると傍目には内向的に見えるようですが、本人は編んだものを子供に見せたい一心だつたと思います。

冬の庭石燈籠に灯を点す

東亜未

お屋敷だから「石燈籠」があつて、冬は早めに灯を入れるのだと思いました。数年まえおじやました八ヶ岳の方でなく、白金のお宅だと思いました。

枯芝に老も若きもボール蹴る

桂子

「ボール蹴」をしてもいい芝生は有難いですね。

芝が芽吹くようになってでも使わせてもらいたい。土が踏み固まつて、ところどころ芝が芽吹いたら芽吹いたままで。

笑ふこと少ない日々や冬に入る

泰江

「爆笑問題」は出ずっぱりで食傷気味になつてきたけれど他のよりはいい。

地方の或る処の行事で、笑い合うというのをテレビで観た。集つてただ笑う。笑っている内に本当に可笑しくなるらしかつた。

寒栢に祖父の手垢の黒光り

寿子

古い家具屋さんだつたということですから、その辺り一帯の宰領のようなことをしておられたのでしょうか。「黒光り」のする拍子木が残っているのだと思いました。

十一月の句会

傳 中野区 カフェ傳

兄弟で父の法要烏うり
抱へ込む喜怒哀楽の冬に入る
冬立つ日身にいひきかす火の用心
冬めくや立食ひ蕎麦の無伴奏
八ヶ岳粧ふ山を従へて
鶏頭花不死身のごとく咲きをりぬ
腕組から懐手へと父の思慮
冬瓜のくつつたくもなく太りけり
秋惜しむ行きも帰りも水に添ひ
引く波のあとの砂浜秋の雨
十三夜横紋筋はそつとして
霜月や物日のうちに母の忌も
立冬の部屋に一匹ちちろ虫
紅葉マーク一片混じる枯葉道

調 さいたま市岸町公民館

喜孝 純子 綾子 藤穂 寿子 泰江 弘子
理和 里子 茂登子 実子 敏子 泰江 純子 喜久恵 綾子 喜孝 弘子 恭子 藤穂 典子

あを吟行会 鶴見 総持寺

山門を通り抜けたる秋の風
木版に槌穴深しこぼれ萩
金剛の吽像夫似秋浅し
新米の献納受ける大黒像
薄紅葉ながき廊下に散り込める
健脚の金剛像や神無月
何となく座していやされ寺の秋
十月の木の影の片ようてゐる
禅林に駐車場あり秋日影
菊日和ミイラめき坐す大僧正
閉ざされし禅堂の庭萩揺れし
銀杏散る参道の果て四脚門
説明の僧の鼻声秋の雲
枯れもせで立ちあがりをる秋あぢさゐ
赤き膳に喝をとなへて秋の晝

ほくと 七座句会 中野区・小川苑

半白を嘆いてみても濁酒
従妹居ず蒟蒻玉の吊されて
夕瀧の懸かるばかりにほの白く
魯田に穂のちらほらと山の風
風邪の神家中隙間だらけなり
日記帳時々空白年つまる
残りぬし一羽の月日白鳥来る
冬もみぢはじめましてと墓の前
はつ紅葉ピカソの描くふつうの絵
神無月日々若返る待合せ

美代子 東亜未 藤穂 泰江 弘子 寿子 茂登子 喜孝 喜久恵 純子 良雄 典子 綾子 恭子 尚子
恭子 藤穂 喜孝 多枝子 夏子 磨子 尚子 東亜未 純子 理和

連句勉強会 毎月第1日曜
希望者は 佐藤喜孝まで
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜
カフェ傳 森 理和
(03-3668-4263)

調句会 毎月第3金曜
岸町公民館 竹内弘子
(0488-86-3501)

あを吟行会 毎月第3日曜
詳細は吟行案内で
七座句会 毎月第4火曜
小川苑 吉弘恭子
(090-9839-3943)

あを吟行会のお知らせ

吟行地 井の頭動物園

日時 2月15日(日) 午前11時

集合場所 吉祥寺駅公園口

句会場 未定

申込み〆切 2月10日

申込先 佐藤喜孝 090 9828 4244

一月は暮から一日も休みが取れないまま終らうとしてゐる。暇よりはよいと家人としてはゐるが……。『最初の記憶』で作品を振り返ると、多様さと質の高さに頼もしく思つて読返してゐる。だが誌上では特作が少ないのが淋しい。今年是非テーマを決めて俳句を作り溜め特作で誌上をにぎはして欲しいと切望してゐる。作品評は

田中藤穂さんから王岩さんへバトンタッチします。あをかき集も一月〆切作品から堀内一郎さんに交替します。このような変化をよい刺激材料にしてみなさんの佳作を期待します。

御芳志深謝

大山夏子様

金井 充様

芝 尚子様

田中藤穂様

東亜未 様

二〇〇九年一月号

発行日

一月二三日

発行所

東京都中野区中央2-50-3
090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子
竹徳房

表紙・佐藤喜孝

郵便振替

00130-655526 (あを発行所)
会費 一〇〇〇〇円 (送料共) / 一年

乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

satou.yositaka@rouge.plala.or.jp



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263